今の気持ちを詠もう！

滋賀県高校生俳句コンクール 入賞作品発表！

昨年、滋賀県内の高等学校等に在籍もしくは、滋賀県内在住で県外の高等学校等に在籍する生徒を対象に実施された「滋賀県高校生俳句コンクール」。応募総数は２３５名５４４句と、たいへん多くの方にご参加いただきました！その中から見事、滋賀県知事賞をはじめとする各賞を受賞された25作品をご紹介します。

【主催】滋賀県　【後援】滋賀県教育委員会・滋賀文学会

滋賀県知事賞

縁日の金魚の背びれ遠き祖母

一ノ瀬剛志（いちのせつよし）／滋賀県立彦根東高等学校 一年

〈コメント〉縁日の頃に昔を思い出して僕を可愛がってくれた祖母を偲んで詠みました。幼い僕に金魚すくいをさせてくれた明るくて優しかった祖母にはもう会うことは叶いませんが、縁日で一緒に買った金魚は水槽の中から僕を見ているようで、いつも温かい気持ちにしてくれます。

特選

白球と夢を飲み込む入道雲

岩﨑玄（いわさき げん）／滋賀県立彦根東高等学校 一年

〈コメント〉甲子園で雨によって中止になってしまった試合を見てこの句を作りました。私もスポーツをする人間として、その一試合のためにどれだけ努力してきたかわかります。その試合が中止になってしまうのは、ただ一試合がなくなるというだけでなく夢までもなくなってしまうようなものだと思い、その悲しさや悔しさを一句に込めました。

宿題がじりじりせまる蝉の声

小野陽菜（おの はるな）／比叡山高等学校 二年

〈コメント〉夏休み、毎日宿題に追われていた日々。思い出したくもないのに、毎年一斉に鳴き始める蝉の声とともに迫ってくる宿題の提出締め切り！！いつか忘れられたらいいなという願いを込めて作品を作りました。

夕焼けにのびる影ふむ帰り道

多鹿瑚雪（たしか こゆき）／滋賀県立八幡商業高等学校 二年

〈コメント〉友達と一緒に帰っている時に伸びていた影がとても印象に残っており、夕日に照らされた影のように長くこのような関係が続けばいいなと思い詠みました。

新米の粒がまぶしい塩むすび

所晴生（ところ はるき）／立命館守山高等学校 二年

〈コメント〉稲は、初夏に植えられた苗が暑い夏を耐え忍び、収穫を迎え、多くの人々に待ち望まれた新米として、人びとの食卓にのぼります。そのようなことに思いをはせると、塩むすびとして目の前にある新米の一粒一粒は、堂々としていて輝かしい存在に思えたことを詠みました。

入選

夏祭りなくてマスクの人の波

奥村一真（おくむら かずま）／滋賀県立彦根東高等学校 一年

〈コメント〉本来は楽しそうな人で賑わっていたはずの街中なのに、今年度はコロナによって夏祭りが中止になりました。通りを行きかう人は皆、マスクをして少なくも楽しそうではありませんでした。貴重な高校一年の夏祭りを棒に振ったくやしさを込めて詠みました。

地区予選来年こそはと夏空に

田中心望（たなか ここみ）／滋賀県立彦根東高等学校 一年

〈コメント〉吹奏楽コンクールの地区予選で残念ながら県大会に進むことができなかった悔しさを来年のコンクールにぶつけようという想いを、夏空に誓うという形で表現しました。

炎天下サイレンに泣く球児たち

細溝凌太（ほそみぞ りょうた）／滋賀県立彦根東高等学校 一年

〈コメント〉毎年、炎天下で行われる夏の甲子園。そこでは多くのドラマが生まれます。特に試合に負けた選手が流す悔し涙は多くの人に感動を与えます。自分も毎年、感動をもらっています。そんな熱い甲子園を句にしてみました。

五線符の中で奏でる雪の華

かっこ&れーか（かっこあんどれーか）／ＭＩＨＯ美学院中等教育学校 四年

〈コメント〉雪の降る様子がリズミカルで、その様子を五線符という言葉で表現しました。「雪が降る」という言い方で表現せずに、あえて「奏でる雪の華」とすることで、きらきらと雪が降っている様子を想像しやすくしました。

2021年11月21日（日）に大津市の義仲寺無名庵にて俳句コンクール表彰式を行い、滋賀県知事賞・特選7名の方に出席いただきました。当日は「DIVER」のムーディ勝山、古賀文沙も司会進行でお手伝い。

特選

「ごめんなさい」虚しく響く夏の果て

猪野美幸（いの みゆき）／滋賀県立河瀬高等学校 一年

〈コメント〉まだ暑さの残る頃、もうすぐ夏が終わるのかと思って詠んだ句です。夏の終わり頃の日の夜は少し涼しく、寂しいイメージがあったのでそのような イメージを込めました。

大問3解けぬ私を責める蝉

清水さやか（しみず さやか）／滋賀県立膳所高等学校 三年

〈コメント〉テストを解いていて、全然解けない私を責めるように蝉が鳴いているところから着想を得ました。静かな教室とは対照的な蝉時雨を感じてほしいです。学校のテストを受けるのも残り少ないので、一回一回を大切にしたいです。

あの日見た夕焼け色の熱帯魚

伴戸綾蘭（はんと あいら）／比叡山高等学校 二年

〈コメント〉熱帯魚の美しい赤・橙色のような空をよく学校の帰り等に眺めながら帰っているのをふと思い出しこの句を詠みました。いつかコロナが終息した際には友人たちとゆっくり星空になる夕空を見に行きたいなと思います。

入選

笑顔、泣き、テスト返しと秋の空

水晶（すいしょう）／ＭＩＨＯ美学院中等教育学校 五年

〈コメント〉先生から「女心と秋の空」という話を聞き、「秋の空のように変わりやすいもので書いてみたらどう？」というアドバイスをもらって、ちょうどテストが返ってくるときだったので、その気持ちを書きました。（ちなみにその時の僕の心はずっと雨でした…）

台風のようには決まらぬ我が進路

西田涼雅（にしだ りょうが）／滋賀県立八幡高等学校 三年

〈コメント〉受験を終えていない自分は、台風の進路についてのニュースを見ている時に「台風のように自分も進路が決まってたらなぁ」と思い、その気持ちを句に込めました。

帰り道黄色広がる銀杏の葉

松岡奏波（まつおか かなは）／滋賀県立八幡高等学校 三年

〈コメント〉学校から帰るときに銀杏の木がたくさん並んでいる道があって、十一月にとても綺麗に黄色になっていたので、その風景を書きました。

特選

じめじめと重たい鞄と蝸牛（かたつむり）

伊吹佳恋（いぶき かれん）／滋賀県立彦根東高等学校 一年

〈コメント〉梅雨の時期、教科書がたくさん入った重たい鞄を背負い、一人憂鬱な気持ちで登校している時、一匹のカタツムリが目に入り、「私とおそろいだなぁ」と面白く感じました。また、ゆっくりと進むカタツムリが可愛らしく思え、沈んでいた気持ちが少し癒やされました。

金木犀自然の香水身にまとう

菅山陽菜（すがやま ひな）／滋賀県立八幡商業高等学校 二年

〈コメント〉学校へ行くまでの道にたくさんの金木犀が咲いています。そこを通るときに金木犀の良い香りを身にまとうような感覚になります。一日の始まりが憂鬱でも、自然の香水をつけることで少し気分が上がり、「今日も一日頑張ろう」と思えます。そんな気持ちを詠みました。

入選

しゃぼん玉雲居の空に離れゆく

内片望（うちかた のぞみ）／滋賀県立河瀬高等学校 一年

〈コメント〉広い空にどこまでも飛んでいくシャボン玉というありのままの情景だけを描きました。読み手にどのような場面なのかを想像してもらい、その人だけの物語を作って欲しいと思っています。

ぼんやりと蝶を追いかけ登校す

高田彩未（たかだ あみ）／滋賀県立八幡高等学校 三年

〈コメント〉新学期が始まる四月、慣れない環境や友達作りに対する不安を抱えて登校していた時、ゆらゆらと揺れて進む蝶を目で追いながら歩いていると不安な気持ちを忘れることができたので、その経験を基に書きました。

コロナ禍でスマホからみる君の汗

花（はな）／滋賀県立八幡商業高等学校 二年

〈コメント〉応援しているスポーツ選手がいるのですが、コロナ禍でなかなか直接応援することができません。その代わりにスマホの中継から、ちゃんと頑張りや、努力を見ているよ！という気持ちを込めて詠みました。

夏休み竹刀と鉛筆持ち替えて

村西春香（むらにし はるか）／滋賀県立彦根東高等学校 一年

〈コメント〉所属する剣道部について作品にしたいと思い、夏休みには膨大な量の課題があることと、夏休みの部活動の全てを一句に詰め込み、休む暇のない充実した日々を詠みました。「竹刀と鉛筆を持ち替えて」という言葉で、部活と勉強のメリハリを表現しました。

入選

向日葵と背比べをする子どもたち

大西颯輝（おおにし りゅうき）／滋賀県立八幡高等学校 三年

〈コメント〉ある夏の日に向日葵畑を訪れた時、背の高い向日葵を見上げる子どもたちを見かけました。その姿がまるで背比べをしている様だったので作品にしました。誰でも情景が思い浮かびやすい作品になったのではないかと思います。

初日の出無限につづく水平線

高野嶺（たかの れい）／滋賀県立八幡商業高等学校 二年

〈コメント〉家族と見た正月の初日の出、沖縄で見た美しい海、自分の中で印象的なこの二つの思い出と、「この美しく綺麗な自然が無限に続いていきますように」、そしてこの大切な家族との思い出が無限に残っていきますように、という二つの想いも込めて詠みました。

バス降りて家まで続く花野道

廣瀬佳菜（ひろせ かな）／滋賀県立八日市高等学校 三年

〈コメント〉学校帰り、バスを降りてから家に着くまでの道には、秋桜や彼岸花など秋を感じることができる草花が咲いており、自分にとって身近な存在である自然を俳句にしました。

校長の「ね」の数かぞえ蝉が鳴く

李日（りにち）／ＭＩＨＯ美学院中等教育学校 五年

〈コメント〉何気ない日常の風景ではなく、夏休み前のわくわくした終業式で友達と校長先生の「ね」の数を数えるという、学生である自分にとって特別な風景を描写しました。